

(2) 浅川扇状地遺跡群桐原地区出土の猪目墨書土器について

伊藤 愛

1 はじめに

長野県埋蔵文化財センターでは、高田若槻線の事業に伴い、2011年度より浅川扇状地遺跡群の発掘調査を実施してきた。調査は吉田田町遺跡・桐原宮北遺跡・桐原牧野遺跡の3遺跡に及び、調査規模は南北850m、幅30mである。

これまで弥生時代～中近世の多彩な遺構や遺物が発見されているが、本年度の調査では、古代の集落域にあたる桐原地区より猪目の墨書を施した土器（以下「猪目墨書土器」という）が出土した。

墨書土器は全国的に多数出土しており、その文字は地名や個人名、集団名を表すこともあれば、吉祥句や呪符を表すものもある。なかでも吉祥句や呪符は記号であることが多く、「#」や五芒星が一般的である。しかし、猪目の墨書を施した土器は、例が少なく、その意義については明らかになっていない。本項では、これまでの調査において本遺跡群内で出土した墨書土器の内容や出土位置を示し、その中で猪目墨書土器の意義を探ることとする。なお、紹介する墨書土器は2017年度までの本格整理作業と本年度の基礎整理段階で抽出されたものに限る。

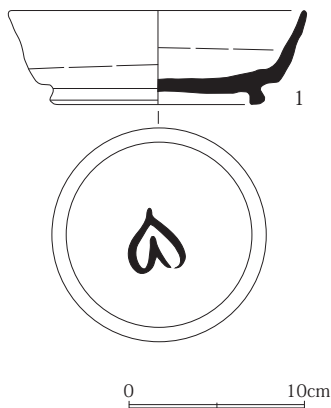
2 事例報告

猪目墨書土器が出土したのは、桐原牧野遺跡の土坑（SK324）である。遺構の分類は土坑としたが、かく乱に切られているうえに半分は調査区外となるため、正確な規模や形状はわからず、竪穴

建物跡である可能性もある。土器は覆土中より口縁を上に向けた状態で出土した。口径12.4cm、高台径8.7cm、器高4.0cmを測り、8世紀後半～9世紀前半の所産と考えられる（第1図・第2図）。墨書は底部外面の中央に記される。書き順としては尖った部分から書き始めて左へ下降し、そのまま一筆書きで下部の窪みを経て頂部に結する。猪目の向きを意識した書き方であることがわかる。

こうした猪目墨書土器は、本遺跡群では過去にも発見例がある。2010年に長野市教育委員会が行った宅地造成工事に伴う桐原宮北遺跡の調査で出土したもので、5点が確認されている（第3図）。出土遺構について、長野市教育委員会は不明遺構（SX01）とするが、地形に伴って底面が傾斜していることから、溝状遺構である可能性も指摘している。後述するが、本遺構からは大量の土器が出土しており、その種別としては須恵器が大半を占める。その中には猪目以外の墨書土器も多数含まれており、さらに円面硯が出土している点は特筆したい。この出土地点から北東へ約100m地点の当センター調査地点でも、これと同一個体であると考えられる筆立て付円面硯が出土しており、文字を使う人物の存在を裏付けている。

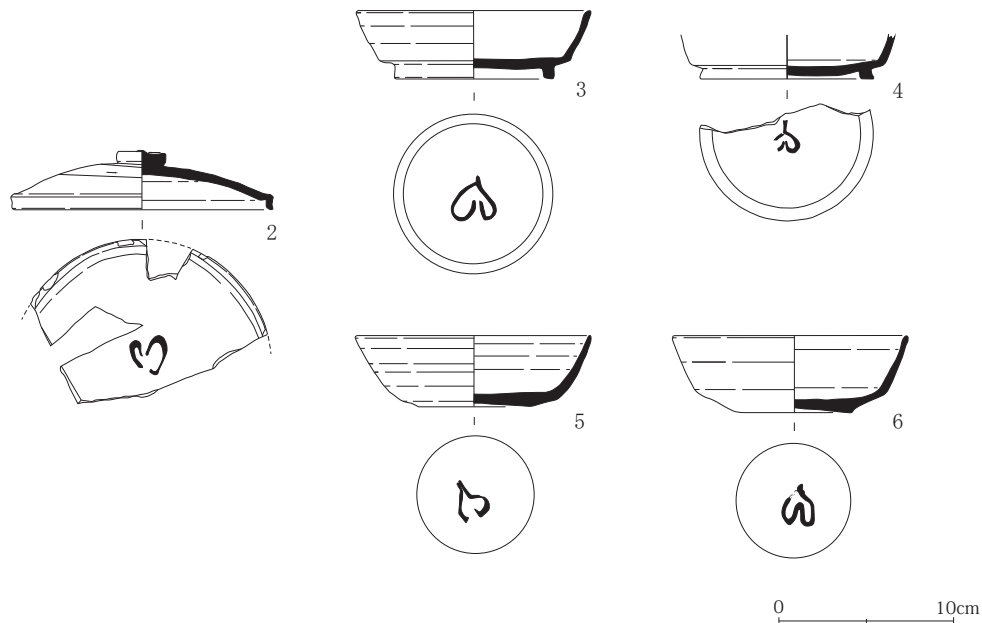
本年度出土の1点と、長野市教育委員会調査の5点を表1に記した。器種は2の坏蓋を除いてすべて須恵器坏である。墨書が施されているのは、坏は底部外面、蓋は内面で、いずれも普段食膳具



第1図 2019年度出土猪目墨書土器



第2図 猪目墨書土器写真



第3図 桐原宮北遺跡出土猪目墨書土器

	出土遺跡	出土遺構	器種	記載位置
1	桐原牧野	SK324	須恵器坏	底部外面
2	桐原宮北	SX01	須恵器蓋	蓋内面
3	桐原宮北	SX01	須恵器坏	底部外面
4	桐原宮北	SX01	須恵器坏	底部外面
5	桐原宮北	SX01	須恵器坏	底部外面
6	桐原宮北	SX01	須恵器坏	底部外面

第1表 桐原地区出土の猪目墨書土器

として使用する際には見えない箇所にかかれて
いる。2～5は1の墨書と比べてやや崩れた印象を
受け、うち2～4の墨書は猪目下部の窪みの部分
を分離させているが、6は繋げて書いており、1
に形状に近い。ただし、1は左方向に下降して書
き始めているのに対し、6は右から書き始める
という違いがみられる。

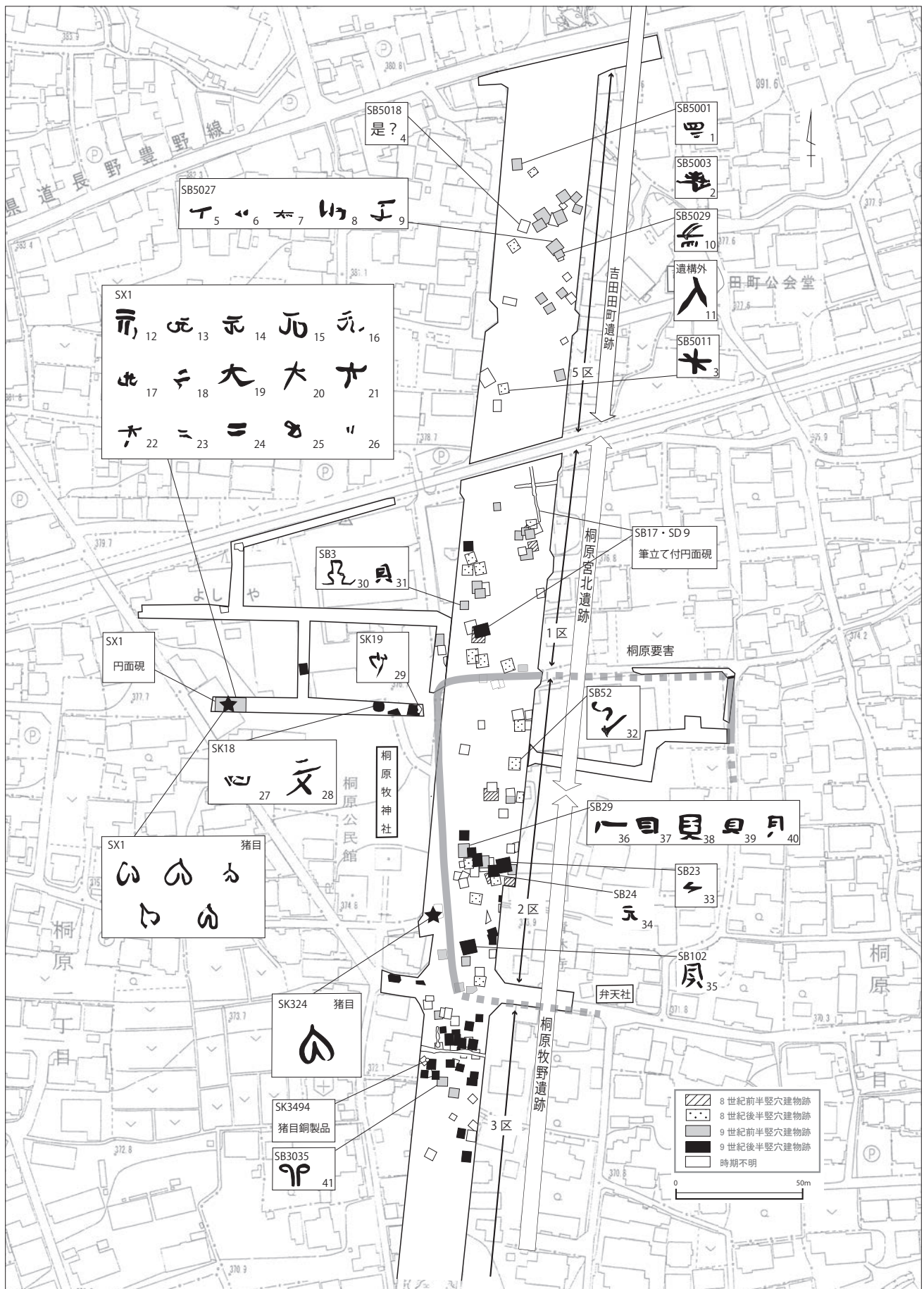
3 調査区周辺出土の墨書土器

ここで、吉田田町・桐原宮北・桐原牧野遺跡で
これまでに確認された墨書土器を概観する。猪目
墨書土器を除くと、確認できる墨書土器は41点
である。そのおもな内容や出土地点は、第4図・
第2表のとおりである。本遺跡群で墨書土器がみ
られる時期は、おおむね8世紀後半～9世紀代に
あたる。そのほとんどが堅穴建物跡（SB）から
の出土であるが、突出しているのは桐原宮北遺跡
のSX01より出土した土器群である。既に述べた

ように、SX01からは大量の土器が出土しており、
そのなかには猪目をはじめとする様々な墨書土器
が確認できる。主なものは「大」「元」で、なか
にはほとんど記号化しており、一概に文字と言
い難いものもある。この他、別の出土地点で目立
つのは「貝」の文字である。本年度の調査でも
SB102から出土しているが（第5図）、SB29では
「貝」の墨書土器が4点出土するなど、その密集
性には注目すべきであろう。

文字が書かれる部位としては底部外面や体部外
面が大多数を占め、体部外面に書かれた文字は、
逆位の可能性のあるもの1点を除き、ほぼすべて
正位である。SX01出土の猪目や「大」「元」はほ
とんどが坏底部外面に施されているが、「貝」は
体部外面にみられるのみである。この墨書の記載
位置について、平川南氏は官衙における代表例で
ある「厨」の墨書に着目し、食器として使用され
るものは底部外面に、祭祀用のものは坏の体部外
面や内面に墨書を施すとの見解を述べている（平
川 2000）。この見解が集落出土の墨書にも当ては
まるのか否かについては検討の余地があるが、記
載位置に何らかの法則があったと考えられる。

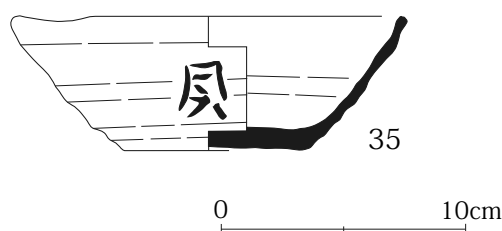
調査区周辺における墨書土器の出土地点につ
いては、ひとつの遺構からの出土量の違いはある
ものの、全体的に幅広く分布している。しかし、猪



第4図 浅川扇状地遺跡群調査地周辺の出土墨書土器分布図

	出土遺跡	出土遺構	器種	文字	記載位置	文字の向き	備考
1	吉田田町	SB5001	須恵器坏	四？皿？	体部外面	正位	下部に文字が続くか
2	吉田田町	SB5003	須恵器坏	不明	体部外面	正位	
3	吉田田町	SB5011	須恵器坏	不明	体部外面	正位	
4	吉田田町	SB5018	須恵器坏	是？	底部外面		
5	吉田田町	SB5027	須恵器坏	不明	体部外面	正位	口縁部のみの残存
6	吉田田町	SB5027	須恵器坏	不明	体部外面	正位	口縁部のみの残存
7	吉田田町	SB5027	須恵器坏	不明	体部外面		
8	吉田田町	SB5027	須恵器坏	不明	体部外面	正位	
9	吉田田町	SB5027	須恵器坏	不明	体部外面	正位	
10	吉田田町	SB5029	須恵器坏	不明	体部外面	逆位か	
11	吉田田町	遺構外	須恵器坏	入？	底部外面		
12	桐原宮北	SX01	須恵器坏	元	底部外面		
13	桐原宮北	SX01	須恵器坏	元	底部外面		
14	桐原宮北	SX01	須恵器坏	元	底部外面		
15	桐原宮北	SX01	須恵器坏	元	底部外面		
16	桐原宮北	SX01	須恵器坏	元	底部外面		
17	桐原宮北	SX01	須恵器坏	元	底部外面		
18	桐原宮北	SX01	須恵器坏	大	底部外面		
19	桐原宮北	SX01	須恵器坏	大	底部外面		
20	桐原宮北	SX01	須恵器坏	大	底部外面		
21	桐原宮北	SX01	須恵器坏	大	底部外面		
22	桐原宮北	SX01	須恵器坏	大	底部外面		
23	桐原宮北	SX01	須恵器坏	二	底部外面		
24	桐原宮北	SX01	須恵器坏	二？	底部外面		「元」の可能性あり
25	桐原宮北	SX01	須恵器坏	不明	底部外面		
26	桐原宮北	SX01	須恵器坏	不明	体部外面		
27	桐原宮北	SK18	須恵器坏	不明	体部外面		
28	桐原宮北	SK18	灰釉陶器皿	文	底部外面		
29	桐原宮北	SK19	須恵器坏	不明	体部外面		
30	桐原宮北	SB3	須恵器坏	不明	体部外面	正位	
31	桐原宮北	SB3	須恵器坏	貝	体部外面	正位	
32	桐原宮北	SB52	須恵器蓋	不明	蓋外面		
33	桐原宮北	SB23	土師器坏	不明	体部外面	正位	
34	桐原宮北	SB24	須恵器坏	元	底部外面		
35	桐原牧野	SB102	須恵器坏	貝	体部外面	正位	2019 年度出土
36	桐原牧野	SB29	須恵器坏	不明	体部外面	正位	
37	桐原牧野	SB29	須恵器坏	貝？	体部外面	正位	
38	桐原牧野	SB29	須恵器坏	貝	体部外面	正位	
39	桐原牧野	SB29	須恵器坏	貝	体部外面	正位	
40	桐原牧野	SB29	須恵器坏	貝	体部外面	正位	
41	桐原牧野	SB3035	須恵器坏	不明	体部外面		

第 2 表 浅川扇状地遺跡群桐原地区出土の墨書土器一覧（猪目を除く）
（※長野市教育委員会調査のデータ（12～29）は報告書（長野市教育委員会 2012）の転用）

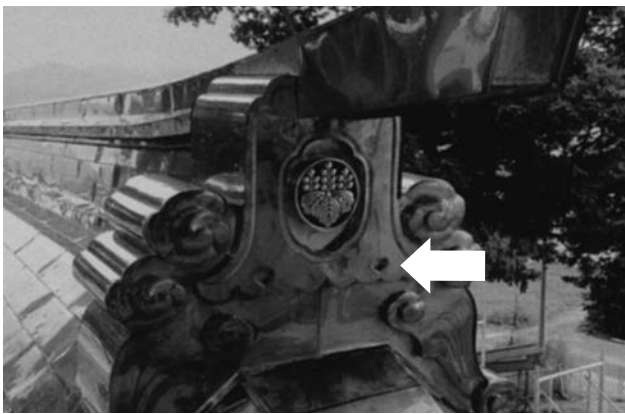


第 5 図 「貝」墨書土器（2019 年度出土）

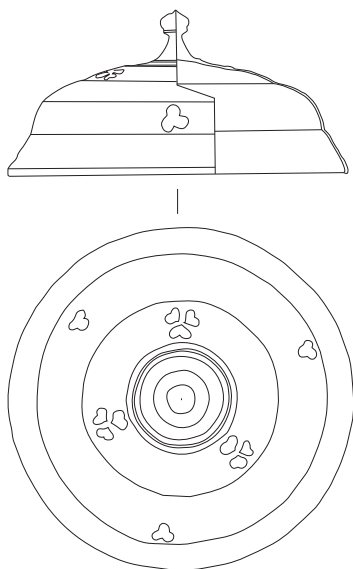
目墨書土器に限定した場合、その分布は調査区中央部の桐原牧神社周辺に限られる。猪目墨書土器が帰属する8世紀後半～9世紀前半は、遺構が遺跡群内全体に広がる時期であるが、調査区北部や南部から出土する墨書土器の中には猪目は確認されず、調査区中央部にのみ見られるのである。すなわち猪目の墨書は集落全体で共有されていたわけではなく、きわめて限定的な範囲で使用されていたということになる。

4 猪目の意義

猪目は、文字どおりイノシシの目を象ったものとされ、魔除けや火除けの記号とされている。所謂ハート形であるが、実際はハート形の逆位が本来の向きである。また、この他に「い」の字を崩



第6図 桐原牧神社の屋根飾りにみる猪目
(出典：桐原区誌)



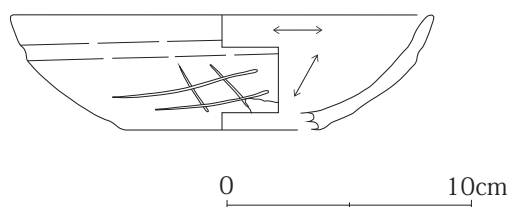
第7図 扇平出土の火舎高炉の蓋 (S=1:2)
(出典：戸倉町誌第二巻 歴史編 上)

したものであるという説や、菩提樹の葉の形であるという見解もある。日本における猪目の最古のものは、6～7世紀の古墳から出土したとされる倒卵形鏝にみえる透かしである¹⁾。果たして当時から「いのめ」と呼んでいたのか、またそれ自体に辟邪の意味があったのかも不明であるが、少なくともこの文様が古墳時代にまで遡ることがわかる。

「猪目」の呼称は14世紀に成立した『太平記』や室町時代の『義経記』にみられ、鉞に施された透かしを「猪の目」と表現している。また1832年に喜多村信節が記した『筠庭雜録』には、「いの目」を眼象²⁾などと同様に穴の名前であるとし、「旧説に猪の目として猪は猛獣なる故、武具に是を用といへり」と記している（日本国語大辞典2002）。つまり武具に猪目透かしを施すのは、イノシシの獠猛さにあやかっていたためとの認識であり、戦場における災いを跳ね除ける利益を求めて猪目を取り入れていたことが窺える。

猪目の使用例として最も多いのは、寺社建造物である。寺社の建築にみられる猪目は懸魚と呼ばれ、古代の寺院などにも施されている。猪目懸魚は火伏せの意味を持ち、寺社が火災に遭わないようにとの祈りを込めて広く使用された。また、平安時代から鎌倉時代にかけて、寺社の扁額の額縁にも猪目がみられるようになり、建物だけでなく石造物の透かしなどにも用いられる場合もある。この猪目の使用は現代にまで引き継がれており、桐原牧神社の屋根飾りにもこうした猪目がみられる（第6図）。考古資料としては、本遺跡群の出土ではないが、冠着山の扇平で、平安時代後期に位置づけられる3つの猪目をクローバー状に配置した火舎高炉の蓋が出土した例がある（第7図）。

これらを鑑みると、猪目とは寺社との関連が深く、呪術的な意味合いが強いといえる。呪符の意味を持つ記号といえ、先述したとおり「#」や五芒星が挙げられ、これらは木簡等にも記されることがある。特に「#」の記号は土器にも書かれる場合が多く、浅川扇状地遺跡群の今年度調査では、土師器の体部外面に「#」を刻んだものが出



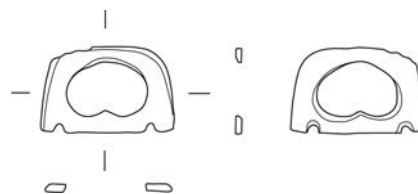
第8図 「#」刻書土器（2019年度出土）

土している（第8図）。猪目が木簡等を使用された例はないが、土器に書かれた猪目も、こうした概念によると考えたい。

また、猪目墨書土器の出土地点が桐原牧神社の周囲に限られるということも、ひとつの注視すべき点である。この一帯には古代に桐原牧が存在し、良馬の産地であったと考えられている。桐原牧神社は古くは「弁財天」「弁天宮」と呼ばれ、弁財天を祀っていた。現在の祭神は大宜都姫命と、弁財天と同一視される市杵島姫命であり、『桐原区誌』（2019）には「馬と水の守護神を祀る」とある。

弁財天は海や泉、川など水に関係する場所に祀られることが多く、実際に桐原の村には三つの水流と七つの清水が存在していたと『桐原区誌』には記されている。文政期に「桐原牧神社」の社号が与えられると、境内には桐原牧神社と弁天社の両方が祀られるようになったが、明治の神仏分離の流れを受け、弁天社は桐原牧神社の南東約100m地点に移され現在に至る。桐原牧神社の前身ともいべき弁天社だが、その成立年代は不明とされている³⁾。猪目墨書が書かれた時期に神社が存在していたかはわからないが、猪目が呪符の意義を持ち、寺社との関わりが深いと考えるならば、神社がある土地で猪目を施した墨書土器が出土するという事は、何らかの関連性が推察できる。前述したように民俗資料ではあるが、猪目は火伏せのシンボルとして水との関わりも指摘されているため、その可能性も考えられる。なお、桐原牧神社に程近い土坑（SK3494）からは、平安時代以降のものと考えられる猪目の透かしが入った銅製品も出土している（第9図）。これも猪目が桐原牧神社の「場所」と関係がある傍証となろう。

ただし、他の呪符記号とは異なり、猪目が木簡などの文字資料に見られないという点では、いま



第9図 猪目の銅製品（S=2:3）

だに疑問は残る。今回は猪目そのものの意味や猪目墨書土器の出土位置の傾向から、呪符などのまじないに基づく可能性があると述べるに留めておくこととする。

5 おわりに

以上、浅川扇状地遺跡群出土の猪目墨書土器について、若干の検討を行った。しかし、対象範囲の狭さや資料の少なさから十分な考察には至らず、推測の域を出ない。また、猪目が全時代に貫して同じ意義を持って使用されていたとは限らず、時期や地域によってその使用目的は変わっていた可能性もある。現代にみられる猪目がかつての意義を失い、形骸化または別の意義を持って使用される場合が多いことも、それを物語っている。さらに、猪目墨書土器の出土位置の付近では、「大」「元」「貝」などの墨書土器も一定量みられ、これらの意義も加えて考えていく必要がある。今後はあらゆる可能性を念頭に置きながら、地域や資料の対象範囲を広げて詳細な検討を行っていきたい。

註

- 1) 出土した古墳については不明。
- 2) 祭祀具である三方に開けられる穴の名称。窓や石造物などに施されることもあり、ゾウの目を象ったとも言われている。
- 3) 一説には創建は1000～1500年前とも言われているが、確証はない。

参考文献

- 桐原区誌編纂委員会 2019『桐原区誌』
 戸倉町誌編纂委員会 1999『戸倉町誌 第二巻 歴史編 上』
 長野県埋蔵文化財センター 2012『東條遺跡ほか＜図版編＞』
 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 92
 長野市教育委員会 2012『桐原宮北遺跡』長野市の埋蔵文化財第130集
 日本国語大辞典第二版編集委員会 2002『日本国語大辞典 第二版』
 平川南 2000『墨書土器の研究』
 山下秀樹 2008「扁額の意匠と構造—平城宮第一大極殿正殿扁額の復元考察—」『奈良文化財研究所紀要 2008』